

85. くっついたり、はなれたり。。。
 ～一筆書きの壁による学校空間の提案～

06168100 保田 恵梨
 指導教員 市川 尚紀 講師

小中一貫教育 子供 一筆書き 外部と内部

1. 設計主旨

近年、少子化による児童数の減少によって、相次いで公立の学校が廃校あるいは統合されている。その流れのなかで、新しい取り組みとして、単に小学校を統合するだけでなく、中学校と一緒にして義務教育の9年間で1つの学校にする取り組みも全国に広まりつつある。それは、学力向上や大学受験への早期対策を目的とする中高一貫教育とは異なり、小中一貫教育では、生活指導や心の育成などといった精神面で子供の成長が目的とされている。

小学生と中学生には、スケールの違い、精神面の違い、担任制・教科制などの制度の違いなど、一緒に生活するうえで、考えなくてはならない様々な問題がある。そこで、小中一貫という新しいスタイルの教育を盛り込むとともに、従来の学校のイメージや問題点を改善するような学校の提案を目的とする。

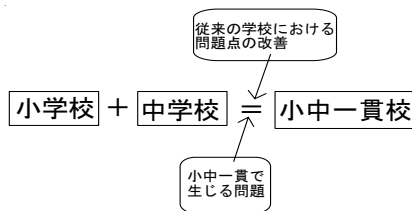


図1 コンセプトダイアグラム

2. 計画地概要

本計画地は広島県呉市中央部に位置しており、現在も実際に学校が存在している。小学校と中学校が隣接して存在し、通りをはさんだ反対側にもまた小学校が存在している。少子化による学校統合を背景に、特色ある教育を目指す呉市は、1999年頃からのこの3校の統合を進めてきた。そして現在、別々の校舎ではあるが呉中央学園として運営されている。2011年には現在の敷地に新校舎を建設し、移転予定である。本計画地周辺は、住宅地が広がる一方で、南方にある JR 呉駅や、市役所、ホール、陸上競技場や野球場などのスポーツ施設、高校などの存在で、呉市の中心部として多くの役割を担っている。



図2 敷地周辺図

3. 計画内容

3.1 一筆書きの壁

空間を生み出す要素として一筆書きを採用する。敷地内に巡らされた1本の線は壁となり、折れ曲がったり、出っ張ったり、凹んだり、広がったり、せまくなったりしながら、内部と外部、内部と内部、あるいは外部と外部を仕切っていく。壁の構成によって、隣り合う内部

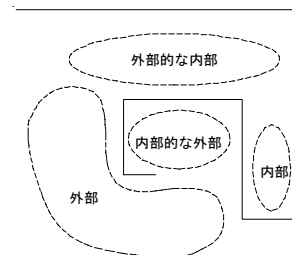


図3 外部と内部

同士や外部同士でも空間の感じ方に違いが生まれる。離れているようで実はつながっていたり、近いようで実は遠かったりといった感覚も生まれる。子供たちは互いの存在に興味を持ち、意識しながら生活していく。

3.2 2種類の壁

校舎は主に2種類の壁で構成される。まず外側の大きな壁で空間を作り出す。そしてその空間は、内側の小さな壁によって、用途に合わせて緩やかに分けられていく。2つの壁は複雑に折れ曲がりながら、交わり、空間を構成していく。場所や用途、子供たちの身体スケール、行動に合わせて壁の高さを変えることによって、多様な空間に変化する。

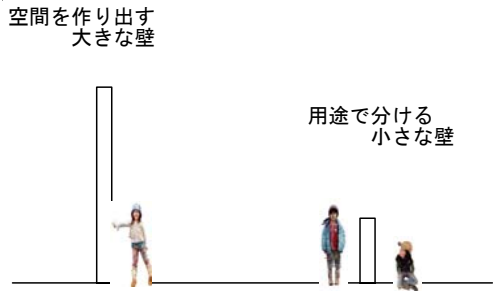


図 4 2つの壁

3.3 グラウンドのあり方

小学校 2 校、中学校 1 校を統合した敷地のため、土地の広さにゆとりがある。体育や部活動、学校行事で使う「大きなグラウンド」の他に、子供たちの遊びや用途に合わせた「小さなグラウンド」を作り、敷地内に散らばらせる。大小様々なグラウンドで、子供たちは自分にあ

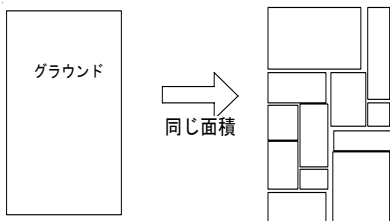


図 5 グラウンドの細分化

った様々な居場所をみつけ、遊んだり、学んだり、他学年との交流を図ったりする。

3.4 校舎のあり方

呉中央学園をふくめ、多くの学校で小 1～小 4 を前期、小 5～中 1 を中期、中 2～中 3 を後期とする「4・3・2 区分」が採用されている。指導内容や指導方法に一貫性をもたせ、義務教育の 9 年間を小中学校の教諭が連携して指導している。異学年交流や小学校での一部担任制の導

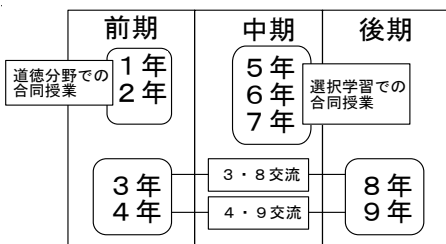


図 6 カリキュラム

入に合わせ、他学年の先生や生徒との交流のしやすい教室配置を行う。

3.5 教室のあり方

教室の近くに先生のスペースや廊下と兼用されたフリー

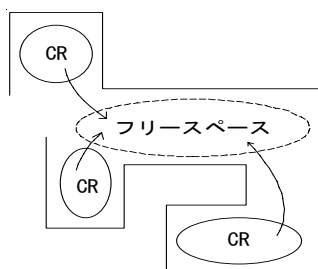
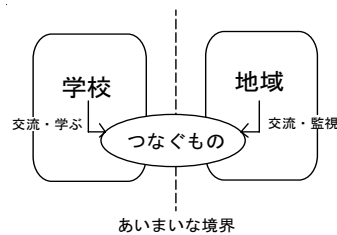


図 7 教室のユニット

スペースを設ける。子供たちの身体スケールや精神面を考慮し、先生や他学年との距離、各スペースの広さ・用途などを考えていく。このユニットの組み合わせで空間を提案する。

3.6 地域への開き方

周辺には住宅街が広がり、敷地に面した通り「あいさつ通り」と呼ばれ、子供たちの通学路であり、地域住民の交流の場でもある。近年、学校と地域間の交流は盛ん



に行われつつある。学校と外部の境界をあいまいにし、交流を図りやすくするとともに、地域の目によって子供たちを守れるようにしていきたい。

図 8 地域と学校をつなぐ

4. 総括

本計画は、実際に統合された学校を計画対象地とし、教室と廊下・フリースペース、校舎とグラウンド、クラスや学年間の境界をあいまいにした小中一貫校の提案である。一筆書きの壁が子供たちにクラス・学年を超えたつながりを感じさせる。あいまいな境界は、子供たちが窓から外を覗いたり、教室から一步出たりという動作で、人の存在を常に感じさせることができる。そこで他の教室の様子を知ったり、グラウンドに出て友達と遊んだり、おしゃべりしたり、一緒に勉強したり、先生に質問したりする。小学生にとって憧れの存在である中学生や、中学生にとって可愛がる対象である小学生を身近に感じることで、子供たちは互いに興味を持ち、関わりを持つようになるのではないかと考えている。

閉鎖的だったり、単一的な空間だったりといった従来の学校に対するイメージを、明るく、どこにいても互いの存在を感じられるような空間に変えることで、子供たちは人とのつながりを感じ、触れ合いながら生活していく。そして日々の生活の中で様々なことを学び、成長していくのではないかと考える。

また、義務教育の 9 年間というのは、子供たちにとって、とても大切な時間であると考えている。子供たちは、家で家族と過ごす時間よりも多くの時間を学校で過ごす。勉強だけでなく、人間関係や生活習慣、道徳性など、これからの人生において大切なことを多く学び、身につけていく。この学校で子供たちは有意義な 9 年間を過ごしていくことを期待する。

建築概要

所在地：広島県呉市西中央 主要用途：小中一貫校 構造：RC 造 規模：2 階建て 敷地面積：29490 m²